

【選択必修】「こども哲学」の取り組みから道徳授業を考える — 「考え、議論する道徳」に向けて—

教職支援センター 講師 河野 桃子

1 担当講座の概要

今年度、筆者が担当したのは、選択必修講座「道徳教育を考える」(A) および (B) それぞれの、ワークを中心とした講座計4コマ分(2コマ×2回=計4時間)である。講座(A)の方は8月に開講し、受講者数は48名、講座(B)の方は11月に開講し、受講者数は44名であった。いずれも、松本キャンパスにて実施した。

講座(A)(B)ともに、全6時間中の4時間は、道徳について哲学的に考えるアプローチを再確認する講座と、道徳の教科化に関する内容構成論と実践論に関する講座を開講していたため、筆者の担当講座では、受講者に、それらの学習内容を踏まえた上でのより実践的なワークを行ってもらうことを中心的な課題とした。以下に、本講座の概要を紹介していく。

●まず、ワークに入る前に、それまでの講座を振り返りながら「考え、議論する道徳」のポイントとして、「読み物道徳」を超えて、自分との関わりで道徳的価値を考える授業であること、および、「押しつけ道徳」ではなく、自分との関わりで多面的、多角的に考える授業であること、の二点を確認した。また、その実現のために、「こども哲学」の取り組みからヒントを探るという本講座の目的を提示した。

●次に、「こども哲学」についての理論的背景を確認した上で、マシュー・リップマンに拠りながら、「哲学対話が育てる3つの思考力」として、「批判的思考」、「創造的思考」、「ケア的思考」を紹介した。また、「こども哲学」の実践を進める上での留意点として、次の二点を挙げた(リップマン2014、河野2014)。

①教師の役割は、「教授する」ことではなく、対話を促進するために質問すること・意見が出るまで考える時間をゆっくりとること・子どもと対等の参加者として意見を述べることに限定されること(「ファシリテーター」としての教師)。

②すぐに返答できる人、頭の回転の速い人だけではなく、あらゆる参加者の探求への貢献が歓迎されるものであること(「セイフティ(安心)」の重視)。

●また、教師がファシリテーターとしての役割を果たす上で必要とされる以下の五点を紹介した(河野2014、p.137-138)。(ゆっくりと生徒の反応を待つ。／自分が間違ったり分からなかったりすることを表現する。／生徒と一緒に探求をする。／議論を進め、思考を深める質問やコメントをする。／生徒の思考が批判的で、創造的で、ケア的になっているかに注意する。)

●以上のことを踏まえた上で、以下の手順でワークを行った。

(0)4～5名のグループを作る。(メンバーの自己紹介→グループ名の決定→ファシリテーターの決定。)

(1)テキストを読む。(本講座では、ラベとピュエシュによる「哲学のおやつ 10代からの考えるレッスン」シリーズ『いとわるい』より、「透明人間になったら？」のページを使用した(p.3-5)。

(2)問いを定める。(それぞれの考えたい問いを、付箋に書いてグループ内で提出した上で、メンバー全員で探求したい問いを絞り込み(複数でも可)、そのなかから「最初の問い」を定める。)

(3)対話を行う。

(4)対話を振り返り、気づきを全体でシェアする。(対話のなかでどんな問いが出たか、難しかったポイントはどこか、面白かった展開はどのようなものか、他のグループに投げかけたい問い、などを各グループから発表してもらった。)

2 今後の課題

以上の講座を行った上で、今後の課題として浮上してきたことに以下の二点がある。

①受講者が、教員として自身の意見を言うことに抵抗を感じていること。この点については、来年度、宇佐美ら(2017)が同じジレンマに対して示した「大人が真剣に問いかつ答えようとしなければ、子どもが真剣に答えを求め、探求を続けることはできないだろう」(p.13)という指摘を共有しつつ、「こども哲学」での教員の姿勢のとり方、ひいては道徳教育全般における教員の立場についても意見交換を行う機会を設けることができると考えている。

②扱ったテキストが「透明人間」という日常生活からかけ離れた内容であったことに対して、一部の受講者から、なぜこのようなテーマについて考えなければならないのかが理解できなかった、他に考えるべきことは日々の生活にたくさんある、という意見が示された。この点については、日常の何かに直接的に役立つわけではない「スコレー(閑暇)」としての哲学の営みについて(森田2011、p.282-283)、来年度はより時間をかけて受講者と意見交換を行っていきたいと感じている。

宇佐美公生、室井麗子、大森史博、板垣健 2017「哲学対話教育の手法を用いた道徳教育プログラムと教材の新たな開発(2)」『岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集』4

河野哲也 2014『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出書房新社

森田伸子 2011『子どもと哲学を一問いから希望へ』勁草書房

ラベ、ピュエシュ(西川葉澄訳) 2008『哲学のおやつ 10代からの考えるレッスン いとわるい』汐文社

リップマン(河野哲也他監訳) 2014『探求の共同体ー考えるための教室』玉川大学出版部